かずさの博物誌

オオバン

～ひたいが白いクイナ～

文・写真／成田篤彦

2012.1.20

「あれ！オオバンが水しぶきをあげている。何をやっているのか？」

ちょうど、小櫃川の下流の橋を渡り切った時に気づいた。

桜並木に隠れて土手から見下ろすと、普段なら「キョン、キョン」と甲高い警戒の声を出し、首を前後に振って川の中央へ逃げるのだが。「変だな」と感じた。

ほおかぶりをした農家の方が、土手すその畑で育てた大根の茎を切って川へ捨てていた。数羽のオオバンが真っ赤な眼を見開き、大根に向かって川の中央からバシャバシャと水面をかけてから飛び立ち、着水して集まってきた。そして、大根の葉を引っ張り合い争って食べていた。

この場所では十年以上前から、オオバンが冬期に見られるようになった。いつもこの畑の周辺の川に集まっているので、不思議に感じていた。

▲オオバン　ツル目　クイナ科
全長39cm。上総では冬鳥、県要保護生物＝2008年1月4日木更津市

これで理由は分かった。

彼らのお目当ては野菜のクズであったと。野菜は彼らにはご馳走なのかもしれない。

さて、オオバンは多くの場合、勢いよく頭から潜り込んで、水草を食んで浮きあがってくる。時に土手の草をついばんでいることもある。

イギリスの研究では食物は水生植物が多いが、小魚や昆虫、軟体動物や外の鳥の卵やヒナを捕食することもある。潜水中はつばさを使うことはなく足だけを使う。７ｍも潜った記録があるそうだ（原戸鉄二郎１９９６オオバン日本動物大百科３巻、平凡社）。水に潜るのが上手なのは足にひみつがある。彼らの足指の両側にひだが広がり、葉状になっていて、水かきのはたらきをする。また、体は真っ黒で、額板（角質のひたいのいた）とそれに続くくちばしが白い。それが、頭骨がそのまま露出しているようにも見える。それに眼が真っ赤である。黒地に白、赤の色彩の奇妙な組み合わせは、遠眼には不気味な感じがする。しかし、近づいてみると眼がルビーのように美しく、はねがビシッとすき間なくおおっていて、水を玉にしてはじいているのをみると見事な水鳥だと思う。また、湖畔のヨシ原の間で休息する姿は日本画になる風景を思い起こし、しみじみとした味わいを感じる。

▲飛び立とうとするオオバン
根元から半分のつばさの先が白っぽい
＝2008年11月24日木更津市

さて、かれらの繁殖地はヨシやマコモが生える広い水域の塩性湿地、沼沢地、河川、河口域、水田などの湿地である。おもに本州中部以北で繁殖し、冬季は本州中部以南に移動するものもいる。

県内では北総の池や沼などの低湿地などに多くすむ。１９７０年代には印旛沼などで繁殖していたが、２０００年以降、繁殖数が少なくなった。東京湾岸では湿地が消失し、営巣地の減少が著しく、近年、繁殖の報告はないそうだ（千葉県レッドデータブック２０１０）。

上総には冬に訪れる数が年々増えているように思える。今では、コガモなどとともに、冬に普通に会える水鳥になった。

たまに、ヨシが生える堰の畔の湿地に初夏まで居続けるオオバンがいる。ひょっとして子育てをするかもしれないと期待したこともある。ヨーロッパでは人慣れするので、親しまれているそうだ。

上総でも繁殖し、人々になじむ水鳥になるといいなと思っている。

▲大根の葉を食べるオオバン＝2008年1月8日木更津市

▲堰辺のヨシの間で休息するオオバン
＝2010年12月2日袖ケ浦市

◎写真・文章の無断転載を禁じます。